

セーレン・キェルケゴール著、鈴木祐丞編訳 『キェルケゴールの日記—哲学と信仰のあいだ—』書評

梶沢 貴司

本書は、キェルケゴールの日記の中から彼自身の信仰のあり方に関わる内容を選び出し、翻訳し、それに解説を加えたものである。編訳者である鈴木祐丞氏は、この本は、「キリスト教信仰をめぐるキェルケゴールの生のドラマを浮かび上がらせようという試みである」（5頁）と述べている*1。

鈴木氏は、2014年に『キェルケゴールの信仰と哲学—一生と思想の全体像を問う』*2を公にしており、本書はこの前著と補完的關係にあると言える。ただし、前著があくまで研究書であったのに対して、本書は一般読者をも対象としており、キェルケゴールの心の動き、思索の歩みをドラマチックに描き出すことに主眼を置き、専門用語には適宜解説を加えて、読みやすくなるよう工夫をしている。私自身も大変面白く読ませてもらった。おそらく原文には翻訳しづらい箇所、文意の取りづらい箇所もあったと思われるが、スムーズに読み進めることのできる質の高い翻訳となっている。鈴木氏が意図していた試みは十分に成功していると言えるだろう。

他方で、これはやはり研究書としての側面も持っている。終章で「試論」として論じられるように、この本は、新しいキェルケゴール理解、新しい研究方法を提起しようとしている。これも非常に興味深いものであり、協会誌に掲載する書評としては、やはりこの側面に焦点を当てて論評していくのが適当だろう。評者の理解では、鈴木氏のキェルケゴール解釈にはこれまでの研究者による標準的解釈とは大きく異なる点がある。今後のキェルケゴール研究において

*1 本書からの引用は本文中に頁数のみを記す。

*2 鈴木祐丞、『キェルケゴールの信仰と哲学—一生と思想の全体像を問う』（ミネルヴァ書房、2014年）。なお、この著作についても、『図書新聞』（2015年3月21日3199号）で書評を書かせていただいた。

論争点ともなりうるだろうことを踏まえて、私自身の解釈を突き合わせつつ論じていくことにする。論点は二つである。キェルケゴールの信仰理解は1848年を境に転換したのか、ということと、キェルケゴール研究において日記をどのように位置づけるか、ということである。

1. キェルケゴールの信仰理解は1848年を境に転換したのか

本書は、1848年にキェルケゴールが経験したとされる宗教的転機に関わる日記を中心に編集されている。その大筋だけまとめれば、1848年にキェルケゴールは信仰についての考え方を大きく転換したということである。——キェルケゴールは1848年4月から5月にかけて、自らの「閉じこもり」、ないし「憂愁」がついに破られそうだという期待を抱くようになった。「閉じこもり」が破られることで、牧師としてこの世的な喜びを享受して生活していくことができるようになるかもしれない、と考えたのである。しかし、結局、この期待は実現されなかった。自らの生において「閉じこもり」が破られ、「反省のあとの直接性」が実現されることは不可能であると認識するに至るのである（149頁）。その後、新たな信仰のあり方を探し求め、『キリスト教の修練』に見られるような「キリストとの同時性」という信仰のあり方を見出す。これは、この世で艱難と迫害にさらされて生きていく苦しみに満ちた生き方であり、一般には達成不可能な理想としての信仰である。しかし、キェルケゴールはこの理想的信仰を世の人々に喧伝していくことこそが自らの使命であると理解するようになった。

鈴木氏の解釈のポイントは、1848年の体験を機に、キェルケゴールは「反省のあとの直接性」が実現不可能であることを認識し、信仰を「キリストとの同時性」として理解するようになったということである。「反省のあとの直接性」という信仰理解から「キリストとの同時性」という信仰理解への転換が生じたということである。

キェルケゴールの後期著作で、「キリストとの同時性」や「キリストの倣い」という思想が前面に出てきたことは明らかであるし、前期著作での信仰理解からある程度の変化が生じたことは多くの研究者が認めるだろう。しかし、それ

が1848年4月から5月に急転的に生じたと考える人はあまりいないのではないだろうか。1848年以前の著作にも、「キリストとの同時性」と親近性のある信仰理解が示されており、もっと緩やかな変化が生じたというのが、多くの研究者の見解であると思われるのである。一つの論点はここである。1848年を境にキェルケゴールの信仰理解は転換したのか、ということである。

鈴木氏の解釈で気になるのは、「反省のあとの直接性」についての理解である。鈴木氏の解釈では、「反省のあとの直接性」は、例えば、牧師としての悠々たる生活、閉じこもりや憂愁からの解放、罪意識からの解放、時間的なものの再獲得等と見なされ、この世的な喜びに満ちた生活が一挙に実現されることと捉えられている。対照的に、「キリストとの同時性」は厳格な苦しみに満ちた生活として特徴づけられる。「キリストとの同時性」は一般には達成不可能な理想であるとされ、達成不可能であるがゆえに、信仰者は罪意識から逃れられず、にもかかわらず、理想を目指して無限に努力を続けていくことが要求されるのである。「閉じこもりや憂愁という年来の性向が取り除かれうるか否か」という宗教的転機の出発点となった問いに対して、キェルケゴールは、ここに明確な答えを得たわけである。否、と。彼は閉じこもりや憂愁を終生担い続けねばならない。反省のあとの直接性の不可能性は、罪意識からの解放の不可能性を意味し、そしてそのことは閉じこもりや憂愁からの解放の不可能性を意味する。」(150頁)

確かに、『畏れとおののき』や『反復』といった著作で書かれている話をそのまま受け取るならば、「反省のあとの直接性」は、失われた時間的なものが一挙に再獲得されることと理解されるかもしれない。しかし、その後1848年までに書かれた諸著作をしてみるならば、失われた時間的なものが一挙に再獲得されるということは、少なくともキリスト教信仰の要点とは見なされていないように思われる。キェルケゴールが、1848年に至るまで、自らの人生において時間的なものの再獲得が生じるかもしれないという期待を抱いていたという日記解釈は、それ以前の諸著作での信仰理解と整合的でないように思われるのである。

「反省のあとの直接性」は、「反復」によって再獲得される直接性のことであ

るが、そもそもこの「反復」という概念には、「受取り直し」と「繰り返し」という二つの意味が含まれていることが指摘される*3。実際、「反復」は「想起」と対比的に語られ、前方へ向かっての受取り直しであると説明される（SKS4, 9 / 著作全集第3巻245頁）*4。この「前方へ向かって」というのは、時間の中で未来に向かっていくことであり、継続的な努力が必要であることを意味していると考えられるのである。

1846年に出版された『哲学的断片への非学問的後書』でも、信仰が継続的努力により成立するものであることが述べられている。「キリスト教はキリスト者に成ることへの前方への方向、キリスト者であり続けることによって、キリスト者に成ることへの前方への方向である。…キリスト教は哀愁のための場所を持っていない。救済が破滅であり、救済は前にあり、破滅は振り返るあらゆる人に対して後方にある。彼らが見るのが何であるにせよ、後方にあるのである。」（SKS7, 547 / 著作全集第7巻403頁）前方への運動が必要となるのは、キリスト教（宗教性B）が、「罪意識」という永遠性と断絶の意識によってしつけられるからである。「罪意識」は、後方へと後戻りして内面的に永遠性と関係する道（想起）を閉ざし、信仰者を前方へと駆り立てる。しかし、キリスト者に成ることはキリスト者であり続けることによって成立するのであり、その限り、「罪意識」は、キリスト者であり続けるために、終生担われ続けなければならない。「罪意識」は、『哲学的断片への非学問的後書』の時点ですでに、救い、罪のゆるし、信仰と表裏一体のものとして理解されていたと考えられるのである*5。

梶田啓三郎は、『死にいたる病』の解説の中で、1848年4月の日記を引用し

*3 例えば、『原典訳記念版 キェルケゴール著作全集 第7巻』（創言社、1989年）484頁、注213。

*4 「SKS」は、Søren Kierkegaard Forskningscenteret によるデンマーク語著作集 *Søren Kierkegaards Skrifter* (<http://sks.dk/forside/indhold.asp>)、「著作全集」は、大谷長監修『原典訳記念版 キェルケゴール著作全集』（創言社）を指す。それぞれ、巻数、頁数を記している。

*5 これは、日記44番で「信仰の弁証法的な規定」と呼ばれるものであるだろう。信仰がこうした矛盾対立する規定を持つということは、1848年以前から見られるキェルケゴールの信仰理解の要点であると思われる。

て、この時期にキェルケゴールの回心があったとしている。ただし、そこには一種の反動もあったとして、次のように述べている。「しかし、信仰は一度これを手に入れればいつまでも所有していられる財宝のようなものではなく、絶え間ない努力によってのみ保持されうるもの、したがって、その努力を怠るならば人間は容易に罪に戻るものであるように、閉鎖性もまたそうである。」*6 榊田啓三郎は、ここで信仰理解の転換があったとはせずに、信仰の継続的努力の表れを見ている。私には、この解釈のほうが他の著述との関係からしてより妥当な解釈であると思われるのである。

2. キェルケゴールの日記をどのように位置づけるか

キェルケゴール研究において、日記をどのように位置づけるか、ということがもう一つの論点である。鈴木氏は、キェルケゴールの著作は、あくまで人々をキリスト教へ導く「間接的伝達」のための媒体であったとし、彼自身の思想を表現しているのは日記であるとする(249頁)。そして、キェルケゴール自身は、後世の私たちに対して「主体的思想家」として立ち現れることを望んでいたのであり、著作だけでなく、日記も併せて解釈されることを望んでいたのだとする。キェルケゴールの思想を解釈する上では、日記は著作に劣らず、ある意味では著作より重要な資料になるべきだという考えである。

こうした提案に対してまず思うのは、日記解釈の困難さという問題である。日記はやはり日記であって、整理された体系的な著述がなされているわけではない。公刊著作に比べても、解釈の分かれる箇所は少なくないと思われる。日記を中心にして解釈していくことは非常に困難だと言わざるを得ないのである。1848年の日記解釈に関して述べたことも、実際その困難さを示していると言えるだろう*7。

それに加えて、日記解釈によってどのような新しい思想が発見できるのか、ということも問題だろう。日記解釈により明らかにされるキェルケゴールの思

*6 セーレン・キェルケゴール、榊田啓三郎訳、『死にいたる病』(筑摩書房、1996年)、361頁。

*7 具体的に一例挙げておこなうなら、日記43番(SKS27, 481-483)は「反省のあとの直接性」の実現不可能性を示しているとされるが(149頁)、それがどうしてそのように解釈されるのか、私にはよくわからなかった。

想には、これまでの研究で明らかにされてきたケルケゴールの思想と根本的に違うところがあるのだろうか。そこから何か新しいケルケゴールの思想と呼べるものを取り出すことができるのだろうか。上記の日記解釈の困難さを考え併せるならば、日記から新しいケルケゴールの思想が発見される可能性はとても低いように思われるのである。

もちろん日記を無視してよいということを主張するつもりはないし、これまで同様研究資料として活用されるべきだと考える。ただし、思想研究においては、それはあくまで著作を理解するための補助的な資料として読んでいくのが適切な読み方だと思われるのである。

さらにもう一つ、やはり気になる問題を挙げておきたい。ケルケゴール自身は、本当に日記を通じて解釈されることを望んでいたのか、という問題である。ケルケゴールの日記の一節——「私の著作だけでなく、まさに私の生が、そのメカニズムの陰謀的な秘密の全体が、研究し尽くされるときが来るだろう」(252頁)——から、鈴木氏は、ケルケゴールが自身の思想を日記も含めて理解されることを望んでいた可能性を読み取っている。しかし、私はむしろ反対の印象を受ける。自分がその人生を含めて研究対象とされることに対する嫌悪感、あるいは諦めを表しているように思えるのである。日記を研究し尽くそうとする人々に対して、主体的思想家ケルケゴールならこう言うのではないだろうか。「他人の人生を詮索していないで、自分の人生に向き合え」と。

確かに、これはどちらが正解か決着が付けられない問題であるかもしれない。これは、ケルケゴールの思想の真髄をどこに見るかということの問題であり、最終的には読者に委ねられる問題だと言えるだろう。だから、私自身は、鈴木氏の提案する日記を中心に据えた研究方法の可能性までも否定するつもりはない。しかし、それが、「新しく、より本質的なケルケゴール理解」(241頁)の出発点であると主張されるのであれば、それには抵抗を感じざるを得ないのである。